

【聞き取り票】

ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じての命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]

記入年月日	2014年 7月 31日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	柴田 フミノ (しばた ふみの)	性別	1. 男 <input type="radio"/> 2. 女 <input checked="" type="radio"/>
生年月日	明 <input checked="" type="radio"/> 大 <input type="radio"/> 昭 14年 月 日 (被爆時年齢 20歳)		
現住所	〒 電話 FAX		
被爆地	<input checked="" type="radio"/> 1. 広島 <input type="radio"/> 2. 長崎 [町名: 平野町 距離 1.7 km]		
手帳区分	<input checked="" type="radio"/> 1. 直爆 <input type="radio"/> 2. 入市 <input type="radio"/> 3. 救護 <input type="radio"/> 4. 胎内 <input type="radio"/> 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] <input type="radio"/> 6. 被爆者の子・孫 <input type="radio"/> 7. その他		
氏名の公表の可否	<input checked="" type="radio"/> 1. 可 <input type="radio"/> 2. 不可		

1. 被爆したときのことをお聞かせください。

被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。

柴田でございます。大正14年1月に今治で生まれました。89歳です。昭和8年に満州事変が始まった時に8歳で、昭和12年に支那事変が始まった年に女学校1年生でした。そろそろ90歳になります。あの8月6日のできごとは今も頭に焼き付いています。よく話をしてほしいと言われてますけれども、最初は話さなかったんです。つらくって話をするどころじゃなくて。被爆したことを隠して結婚したんです。

大正生まれでずっと戦争の真っ最中だったので、男の人は戦争に駆り出され、女の人も従軍看護婦になるという人が女学校でもいて、私も戦地に行きたい、戦争のために日本のために尽くしたいなど自分で思っていましたから。5人きょうだいの末っ子で、母に泣きながら「それだけはやめてほしい」と言われ、母の涙を見てやめました。けれども本当は従軍看護婦になりたかったんです。

今治の女学校を卒業して、兄が広島県の庁勤めをしていたので、18歳の時に広島に行きました。うちで遊んでいるわけにはいかず、挺身隊に参加し、軍隊の缶詰をつくる糧秣廠、軍人の服をつくる被服廠にみんな割り当てのような感じで行ったんです。私は広島のはずれの海に近い宇品の船舶司令部の運輸部といって兵隊が出入りするところの庶務課に勤務しました。

私の家は母と兄夫婦と私で4人家族で住んでおりまして、それにしては家が広くて余った部屋があったので、うちで兵隊さん(将校)を2人預かってた時期がずっとありました。広島の旅館だけでは兵隊さんをまかなえる所が足りなかったからですが、食糧の配給も預かる兵隊さんの分は軍の方からもらっていました。軍隊には食糧がいっぱいありました。朝、出勤しましたら牛乳は飲ませてもらえるし。牛乳もお米もすべてのものが配給の時代だったんです。

それで、大佐の方と中佐の方と二人、うちの2階で預かっていたんですが、ちょうど8月6日の朝、軍から迎えにきて出かける時に「お母さん、気をつけてね」と言ったんです。私が今その話をお友達にすると「知ってたんじゃないの?」と言われるんですけど、私はそれはしないような気がするんです。いろんなことはあったかもしれないけれど、8月6日に原爆を落とすということは誰も知らなかったと思うんです。

仕事始めは8時だったので8月6日の朝、8時までには船舶司令部に着いて、8時15分は朝礼で外に出てたんです。炎天下で朝礼をしていて空襲警報が鳴って、それが解除になって、またしばらくして空襲警報が鳴り、B29が上空を飛んでいるのが見えたんです。そして「なんかあれ」「なんか落ちた」「落ちた」と誰かが言ったので見たら、フワフワフワフワと3つぐらい落ちてたんです。そうしたらピカーッと光ってドーンと身体に響くような音がしたんです。「ええーっ、なんだろうね」なんて言って、その時は全然わからなかったんです。船舶司令部は宇品ですから。

広島市は川が7つ流れていて三角州の上に街ができていたんです。「どうしたんだろうね」「どうしたんだろうね」と何もわからないような状態でいたら、自転車で兵隊が町の方から入ってきて「大変だ、大変だ」「広島市が焼けている」とか「全滅だ」とか言いながら、二等兵の兵隊が入ってきたんです。それから「いやぁ大変だ」と上を下への大騒ぎになったんです。それで、うちで寝泊まりしていた中佐の方が部下の少佐の人に私を連れて行って家を見てきてくれと言われたんです。私の家は平野町(ひらのまち)にあって、船舶司令部は宇品にあったんですよ。海岸沿いに兵舎がずっとあったんで。(広島市の地図を見

せながら回覧して見て下さいとのこと)

その将校と一緒にうちを見に行こうと思って御幸橋まで行ったら、もう広島市街が全部バシャーンとなっていてあちこち火の海になってました。うちは橋のそばにありましたから、橋のたもとから燃えているのが見えるんです。柱も何も全部、音とともにベチャンコになったみたいです。

本当に原爆が落ちた時は、見渡す限り、御幸橋から広島駅が見えるぐらい焼け野ヶ原だったんです。焼けて焼けて焼けて、その時は何が落ちたかわからなかったんです。原子爆弾っていうことはずっと後で知ったんですけど。ピカッと光ってすぐ人が亡くなりましたからね、あれは殺人光線かなということも言ったりもしていましたけれど。とにかく、ものすごい音がしたんです。おなかにドーンと響くような感じでした。

私の家では兄嫁が即死でした。母は母屋にいて、朝ごはんの残りをざるに入れて冷蔵庫がないので柱かどこか風通しの良いところをかけようかなと思っていたところをバーンと玄関まで飛ばされて、玄関の上には2階がないから助かったんです。兄嫁は離れにいたけど母屋に飛ばされて、母屋が2階だったから下敷きになってもう即死だった。県庁に勤めていた兄は、その日はちょっと遅く出たんです。自転車で出かけて途中で原爆にあって、転んで足に怪我をしました。

【この項に関わる参加者との質疑応答】

●一緒に働いてらした司令部の方々っていうのはどうだったんでしょうか？

(柴田さん): 朝礼でずらっと兵隊さんが並んで、左の方に女の子が並んでた所に、木造兵舎の窓枠が飛ばされてきて私より3人ぐらい向こうの人の頭に当たって倒れたんです。すぐに兵隊たちが抱えて軍医の所に連れて行ったんですけど、当たり所が悪かったのかそれから2日ぐらいで亡くなりました。

●柴田さんと一緒に何人ぐらい女性がいたんですか。

(柴田さん): 私の所属していた船舶司令部の庶務には女の子が20人ぐらいいました。

●その方たちとの交流とかはなかったのですか。

(柴田さん): 交流していたけどみんな亡くなったの。私だけ残ってるんです。

●20人ぐらいの中で。皆さん、原爆の影響で亡くなった方が多かったですか。

(柴田さん): 原爆症で亡くなった方が多いです。みんな自分の家が市内にあるから家族を探しに入るじゃないですか。私も入ったんだけど、たまたま運がよかったんですね。

●御幸橋ってけっこう写真でいろいろ残っている、ものすごく焼けたところですよ。おうちも何もその辺は倒れて真っ黒だったんですね。

(柴田さん): 宇品の方から歩いて行くと初めての橋が御幸橋で、橋の手前は家が倒れたぐらいで焼けてないんですよ。橋から向こうは全部見渡す限りの焼け野ヶ原で行くこともできなかったんです。広島駅は見えないところだったのに見えるし、双葉の山も見えるし、全くの焼け野ヶ原でした。

●兄嫁さんはもうその時は焼けて死体もわからなかったんですね。

(柴田さん): 離れにいて母屋に飛ばされたことはわかるけれど、骨までなかったです。

2. その後の人生についてお聞かせください。

母と兄は無事だったんですけど、すぐにわかりませんでした。私は母のことがすごく心配で、ついてきた将校が橋のたもとから土手をずっとうちの名前を呼んで探してくれたけどわからない。「きっと母は即死し

たな」と思いながらも8月6日から毎日毎日、朝早く水筒にお水を入れて探しに出ました。

死体を焼くのにあっちに集めこっちに集めして、市中にいっぱい集めた所があるから、母と兄を探すにはそこに行かなきゃならなくて市中を歩き回ったんですよ。焼かれる前にどうしても母を探したいと思って、8月12日には似島にも行きました。死んだということしか頭がないもんですから、死体が山のように積んであると下敷きになっているのかもしれないなんて思うし。私は今治出身で、今治に家もあって、おじやおばも皆健在だったので、何もないじゃ話ができないなと思ったんですけど、何もみつからない。もうこれは駄目かなと思って12日の夕方、うちの近くを歩いていたらご近所のおばちゃんが「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん、あそこにお母さんいらっしゃるよ」と言ってくれて、御礼も言わないで言われた所にターツと駆けていったら、母と兄が小さくなってショボンとなっていたんです。3人で抱き合って泣きました。将校に「明日の朝迎えにくるから今日はここで3人で休みなさい」と言われて、そこで3人でもうほんとに肩を寄せ合って休んだんです。

もう嬉しいというかなんというか、しばらく抱き合って泣いたことがものすごく記憶にあるんです。「泣くことはないだろう」と言いながら兄も涙を出してました。嬉しいというか、とにかく母に会えたということがよかったなあと思って。私が2歳の時に父が胃がんで亡くなったので、5人きょうだいの末っ子でみんなに可愛がられてそれこそ縦の物を横にもしない生活だったんです。「よかった、生きててよかった」と思って、その日は3人でトタンの上で寝たんです。本当に着の身着のままでしたけど、軍隊にいましたからおにぎりをつくってもらっていたんです。そのおにぎりも食べる気がなくてそのまま持ち歩いていました。母に「食べる」と聞いたら「うん」と言うのでおにぎりを半分こにして兄と母が食べました。

本当に食料もろくなものがなかったんです。おにぎりなんてそのころ食べることはできなかったんです。お雑炊とかお粥とかで、白米ではなくて七分づきでした。今思えば胚芽がついているから栄養があるんですけど、粘りのないお粥を食べていました。私は幸い軍隊にいましたから、朝食をしないで行ってもまあまあけこうなものをいただいて、お風呂にも入れて、あの頃にすれば幸せな生活をしていました。

母と兄と会って、あくる13日の朝、軍隊の人が迎えに来てくれて宇品の兵舎、カマボコ型の粗末な兵舎に入りました。広島は軍人が集まる所で、宇品は戦地へ行く、戦地から帰るといふ玄関口だったんです。そこにいましたから、兵舎では食べるものには不自由をしませんでした。

15日は終戦でした。私は日本は勝つとばかり思っていましたから、終戦になったということがピンとこなかったんです。ラジオの放送を聞いたけれど何を言ってるかさっぱりわからない。ガーガーピーピーばかりで「なんて言ったの」と聞いたら、みんな「なんだかわかんない。もう少し頑張ってやれっていうことじゃないか」とかって言っていました。そうじゃなくてその時終戦だったんですね。そういうことはその時、全然わからなかった。上の人は知ってたらしくて、なんか目が赤くなってました。

その日に母は宇品から船で家のある今治に帰って、兄はその1日前に兄嫁の実家の尾道に寄って今治に帰ったんです。15日に終戦になっても、私たちは挺身隊だから、今だったらじゃあ自分の家に帰って言えますけど、その当時はやっぱり軍隊は上の人の命令一下で動いていましたから、9月15日まで軍隊にいました。それからが大変でした。マル秘と押した秘密書類がたくさんあったのを焼く仕事をしたんです。船の青写真とかがあったのを全部焼くというから「どうして焼くの」と聞いたら「アメリカが上陸するから駄目なんだ」と言うんです。そんなもの、いま考えてみたらどうってことないんですよ。アメリカの方がずっとはるかにすすんでいるんですから。兵隊が一生懸命汗水を流して暑いさなかを焼いて、倉庫から出

してそこまで持っていくというお手伝いをして9月15日まで船舶司令部にいました。

16日に軍隊から小さな船を出してくれて今治に帰ったら、兄が8月23日に死んでいたのを知ってびっくりしたんです。兄が亡くなるからといっておじたちが至急電報で3通打ったよと言うんですけど、あの当時のことですから私の手元に電報なんてこないんです。母と二人きりになってどうしようと思ったんですけど、おじやおばたちが「何も心配することはないそのための親戚なんだから大丈夫だから」と言ってくれました。その時はまだ戦争の名残で自分ながらしっかりしていたような気がしていたんです。

長兄と広島で一緒に住んでたんですけど、次兄が三鷹の日本無線で電波探知機をつくる仕事をしていて招集されなかったんです。その次の姉が結婚して福島の方において、その次の兄が兵隊で満州にいました。これからどうしようかと思っていた矢先に、次兄が今治に帰ってきて、母をうちに連れていくと言って、戦後は三鷹で生活をするようになりました。

【この項に関わる参加者との質疑応答】

● 兄嫁さんが亡くなられたことをお兄さんがご実家にご報告に行かれたんですね。一家全滅のお家もたくさんあったわけでもんね。

(柴田さん): 兄嫁の実家に兄が行った時に、お化けかと思ったと言われたと兄が言ってました。「ええ〜っ」なんて下から見上げて足があるという感じで。「下から見上げて、あ、もりおさんどうしたのと言われたよ」と言ってました。だからお化けが帰ってきたと思ったんじゃないかな。

● お兄様が亡くなった時の状況をお聞きになったんですか。

(柴田さん): 母やおばから聞きました。兄は爆心地近くまで自転車で行ってたんですけど、よく帰ってきたと思って。母や自分の妻のことが心配で、必死に帰ってきたんだと思うんですよ。日陰を走っていたようで火傷してはいないんですけど、左足に怪我をしてました。8月13日に軍医に診てもらって黄色いリバガーゼをいくら入れてもいくら入れても入るほど深い傷で、真っ青な顔をして母のそばにちょこんと座ってました。長い棒で杖をつきながら帰ってきたって母が言ってました。火傷もなにもしてなくて、ただ足の傷だけだったんですけど、目から鼻から口から耳から全部、血を出して出血多量で亡くなったんです。それが原爆症というんだと思います。

● お兄さんは今治に帰ってから原爆症がダーッと出たんですか？症状が出てから1週間とか10日とか？

(柴田さん): 8月6日に原爆が落ちて12日に再会して、13日に兄嫁の実家に寄ってそれから今治に帰って、23日に亡くなったんです。その時、今治でお医者さんにかかったけど、お医者さんも原爆ってということがわからないから、ただ注射をして熱さましを飲みなさいって感じだったらしいです。

● お母さんはその後、どうされたんですか？

(柴田さん): 母は、ただ飛ばされて打撲だけだったんですけど。家がペチャンコになって、私の赤い鼻緒の駒下駄を履いて出てましたね。「危ないから裸足で出ちゃ駄目」って常に言ってましたからね。赤い駒下駄を履いて出てました。額にガラスが刺さってました。私がガラスを抜こうとしたら将校が「今抜いちゃ駄目、出血するから。明日軍医に抜いてもらった方がいい」と言われて、ガラスが入っているけど痛くないのと聞いたけど「痛くない」って。痛いけど気が張っていたんでしょう。「あ、刺さってるの？」と言ってましたけど。軍医に抜いてもらって治療してもらったけど、深くて死ぬまで傷跡になってましたね。ガラスが刺さったのを抜いた後、赤チンか何かをつけたぐらいで、それを毎日やってたようでした。そこに傷があっただけですが、母も原爆症で亡くなりました。

●お母さんはいつぐらいに亡くなったんですか？

(柴田さん):母と私が一緒に三鷹の次兄の家に来ていて、昭和26年に亡くなりました。医者もどういふふうに治療していいかわからないんです。熱が高かったものですから熱さましをくれるとか。当時はとにかく原爆症という症状すらわからない状態ですから。ただ熱さましを飲まされたみたいです。それで口から鼻から目からも出血して出血多量で亡くなったんです。

●(目じりを指して)こういうところから？

(柴田さん):そうそうそう。涙じゃなくて血がタラタラタラタララーっと流れてましたよ。

●口の中もただれたり、歯茎からも出血しちゃうんですか？

(柴田さん):ただれなくて剥げる。歯茎からも出血しました。もうとにかく出血多量でした。

●その時はもうお勤めかなにかをされておられたんですか？

(柴田さん):私は家にいました。兄が日本無線で電波探知機の製図の仕事をしていたのでそれで招集が来なかったというふうに聞きましたけどね。

●戦争の続行に必要な仕事をされてたからってことですね？戦後もその会社だったんですね？

(柴田さん):そういうことですね。兄はずっと日本無線でした。

●ご一緒にご家族を探して下さったという将校の方とは、その後連絡をとられたんですか？

(柴田さん):その人は北海道の方だったんです。その少佐の方が汗を拭き拭き一緒に市街をずっと歩いてくれました。広島はまた暑いんですよ。夕風といって山からと海からの風がピターっと止まって超暑いんですよ。あの頃はお天気続きでさらに暑かったんです。だから本当に有難かったです。それでときどき三鷹に移ってからも手紙を出したりしてました。そうしたら3年後にその方の奥様から亡くなったっていう通知をいただいたんです。亡くなったという手紙がきてすぐに私も手紙を出したんです。そうしたらやっぱり出血多量で亡くなったっていうふうにかがいました。だからその方もいわゆる原爆症ですよ。

●被爆者ということを隠して結婚されたとかおっしゃっていましたが、そこらへんをお聞きしたいのですが。

(柴田さん):私は被爆したってことを隠して昭和26年に結婚したんですよ。お見合いの時に「広島って言うじゃないよ」「今治って言っときなさい」とみんなが洗脳するんですよ。だから広島ということは一言も言わないで結婚したんですよ。そうしたら武蔵野に被爆者の会があって、その人が家に来て「被爆者の会があるから出て下さい」って来たからわかつちやった。

●どうして訪ねてこられたんでしょうか？

(柴田さん):被爆者手帳を取っていたからです。私はさらさら取る気がなかったんですけど、母が「取った方がいいよ」と言うから母と二人で取ったんですけどね。お見合いの時には「広島って言うんじゃないよ」とみんなが言うので、「うん、わかったわかった」と言って。母は私が結婚してから亡くなりました。

●被爆者の会に誘われたのは何年ごろですか？

(柴田さん):昭和28年だったかな。被爆者の武蔵野地区の会長さんが家に見えて、話をされて、「ああそうか、じゃあやっぱり入った方がいいか、それでみんなに、後世に伝えた方がいいのかな」っていうふうに思ったんです。その方もお仕事をしてましたから日曜日に見えたんですね。上がってもらって話をした時にうちの夫も奥の6畳にいて、私の声が大きいので聞こえたんですよ。帰られたあとで夫が「お前さん、広島で被爆したのか」と言うから、「そうよ」と私もすまして言ったんですよ。「へえ～」と言うから「何がへえなの」なんて言ったら、「俺知らなかった」というから「別に知ったって知らなかったってどうってことないでしょう」と言

ったら、「ああそうかな、広島かあ」と言っていましたけどね。それでその一言で終わり。

●一同：うーん。

(柴田さん)：一緒に住んでいたお姑さんがなんか嫌な顔をしてました。「アンタ、広島なんだって」と言うから、そこで卑屈な顔をしちゃあ自分が困ると思って「あっそうですよ」なんて私もすまして言ったら、「そんなのお」なんて言って。結婚して3回流産したんですよ。それで義母が「だからアンタ流産したのよ」と言うけど、流産は被爆とは関係ないですよ。寒いのお風呂場の掃除なんかしてね、明治生まれのお姑さんだからね、もう小さくなって一生懸命掃除、洗濯なんてやっていたから、それで流産したんだと私は思っているんですけどね。その後はもう子どもができなかったですね。

●一同：ああ(感嘆)。

(柴田さん)：でも今思うとできなくてよかったかなあなんて思います。やっぱり市街を歩き回ってますから、やはり自分自身があんまりうれしい状態ではないですからね。

●一緒に探し回ってくれた少佐の方は3年後に亡くなったとのことで、なんかすごく一人一人に影響の仕方が違うんですね。

(柴田さん)：違うんですよ。やっぱり個人差があるんじゃないでしょうか。

●個人差があって、やっぱり影響を受けやすい人は早くそういうふうに症状が出ちゃう人がいるっていうことを認めないといけないですよ。データがどうの平均がどうのというんじゃないで。

(柴田さん)：本当に個人差があるんです。私はその日のうちに出かけて行ってぐるぐるぐるぐる回ったんだから、本当に原爆症でもっと早く亡くなってもいいと思うんですけど、それが90近くまで生きててね。私、なんでいつまでも生きてるんだろうと思うんですけどね。5人の末っ子ですから、きょうだいみんな亡くなりましてね。三鷹の兄がいたところに甥がいるんです。「フミ叔母さんって一体いつ死ぬんだろうね」と言う。「縁起でもない、長く生きてろ」と言うんですけど。90にもなるのに杖もつかないで、夫も亡くなって今ひとり生活して、こういう所に来て話をさせていただいてというのを思うと。被爆といっても、市中を歩いていても私のように元気な人もいます。あと半年で90というのに「90に見えないわ」と言われると「そうかいそうかい」と言ってますけど、だからやっぱり個人差があるんじゃないでしょうかね。

●流産は被爆のせいではなく、姑さんの厳しい扱いに耐えてやっていたからとおっしゃっていましたが、身体の中の悪いものをお腹の赤ちゃんが引き受けて対外的に出しちゃったという説も聞いたことがあります。それがフミノさんの命を永らえさせているのではないのでしょうか。

●私も聞いたことがあります。死産の方も多かったですよ。

(柴田さん)：そうかもしれないわね。ああ、じゃあ流産した子に感謝しなくっちゃ。

●なんでいつまでも生きてるんだろうとおっしゃっていましたが、3人のお子さんの命でということも。

(柴田さん)：きっとそうだわ。じゃあ有難く感謝して仏壇に手を合わせなきゃ。

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいこと をお聞かせください。

とにかく戦時中も戦後も食糧難でろくなものを食べていなかったんです。よくごみの日にパンの端っこが捨ててあったりすると、ふいつと戦争中を思い出して、ああ今の人は贅沢であふれているなあと思うんで

す。勿体ないなあ有難いなあと思ったりしますけど。雑炊食堂で箸が立たなくちゃ駄目と聞いたことがありますけど箸なんて立つどころじゃなくてサラサラの雑炊だった。その頃はさつま芋のつるや葉っぱも食べていました。あの頃の生活をふいっと思い出すとなんか怖い気がします。軍隊のいう通りの生活をしていましたから。「あっち行けと言えばあっち」「こっち行けと言えばこっち」、もう本当に軍隊さまさまで、軍隊の命令一下に日本国中が動いていたんです。

母が戦後「軍人が政治をとったからこういうことになった」と言っていましたけど、「井の中の蛙、大海を知らず」でアメリカなんかと喧嘩をしたって勝ちっこないですよ。赤子の手をひねるようなもんでね。終戦になってから「ええっ、そんなのがあったの」「そんなのがあったの、ええっ」なんて驚くことばかりでしたね。「ああアメリカは進んでいるな」と思うことばかりでした。日本の国は貧乏だったんですよ。軍人が政治をとったから税金を集めてもほとんど軍事費に使っていたようです。だから軍隊のためにみんながづらい思いをさせられたんです。本当に今思い出してもぞっとするような生活でした。お米をつくっても全部供出なんですよ。お魚も供出してみたいですよ。軍隊の下の方の人は駄目ですよ。招集令状で赤紙一枚で二等兵、一等兵、30歳ぐらいで来た人なんかは本当にづらい思いをしていましたけど、軍人の上の方はいい生活をしてましたよ。それが戦争の敗けた原因の一つじゃないかなと私は思います。本当に軍人が政治をとるとこういうことになるのかなと思いました。軍人が政治をとったからオイッチニオイッチニで兵隊ばかり集めてそれで戦争に、勝つ見込みがないのに「勝つんだ、勝つんだ、勝つんだ」とみんなを煽ったんです。それでまあ今思うと、敗けてよかったかなと思います。やっぱり政治は政治家でなきゃ駄目だと思いました。

宇品の船舶司令部の朝礼の時に竹槍をさせられたんです。竹の先を斜に切って、アメリカ兵が上陸してきたらその竹槍で3人殺せと言ったんですよ。戦争は人殺しなんです。「兵隊の胸を突いてグワッと右へ回せ。心臓をねらってやれっ」といって、毎朝竹槍の稽古をさせられたんです。考えてください。竹槍で人が殺せますか。とにかく女の子が男の人の心臓をグワッと突いてグワッと右へ回せ、そんなことができるわけがないんです。そういう馬鹿な教育を私は受けたんです。日本国民全部がそういう教育を受けたんです。その時は軍人の言うことは正しいと思ってたんですよ。「右向け右」と言えばハイっとみんな全部右を向いて、左を向けと言えれば全部左を向いて、軍人の言う通りに生きてましたから。だから今思うとぞっとするんです。原爆が落とされた時も軍人たちはまだ戦争する気でいたんですよ。そんな馬鹿な、今思うと本当に馬鹿なことを軍人は考えていたんですよ。そういう中で私は生活をしていました。

もう本当に戦争はしちゃいけない。戦争っていうのは人殺しなんですから。相手を殺さなくちゃ自分が殺される、戦争というのは人殺しなんです、はっきり言って。だから戦争は絶対してほしくないと思う。映画やアニメなんか見るとカッコがいいですけど、決してあんなもんじゃないんです。人殺しなんです。戦争はしてほしくない。今の若い人に本当に伝えたいのは、戦争はしてほしくないということだけを私は伝えたいんです。戦争は人殺しなんですから。相手を殺さなければ自分が殺される、相手を殺すということですからね。戦争だけは絶対に避けてほしい。カッコいいもんじゃないんです。人を殺さなければ自分が生きていけない、それが戦争なんですから。ましてや今は核の時代ですから一発で火の海になりますから。戦争だけは避けてほしい。戦争は絶対に避けてほしいと思います。

【この項に関わる参加者との質疑応答】

●つらくてあまり話さなかったとおっしゃいましたよね。それが話すようになったお気持ちの変化のところをお聞きしたいんですが。

(柴田さん):それはね、やっぱり伝えなきゃいけないと思ったんです。私自身がやっぱりこれは伝えた方がいいんだと思ったんです。若い人に戦争してほしいから。とにかく戦争をすると大変なことになります。戦争だけは避けてほしいと思って、それでみんなにお話しするようになったんです。

●最初はつらくて話せなくて、被爆者の会の会長さんに誘われて入って「ああやっぱり話をした方がいいのかな」と思われて、会に入ってすぐにお話を始められたんでしょうか？

(柴田さん):そうです。そうしたら武蔵野の中学校から話してくれという話がちょいちょい来るようになりました。

●だんだんと積み重ねていく中で何か気持ちの変化とかありましたでしょうか？

(柴田さん):別にそれはなかったですね。とにかく自分が若い人に伝えなきゃ若い人に伝えなきゃという気持ちだけがあせってたんです、その当時。

●いつぐらいからお話を始めたんですか？

(柴田さん):32～33歳ぐらいかな。まだその頃は「核」というのがあんまり今のように浸透していなかったんですよ。だから「へえ原爆かあ」という感じで皆さん聞いてました。

●若い人に後世にしっかりと伝えていかなきゃならないというのが使命とおっしゃってました。今日も若い方がここにも来ていて被爆を体験された方として訴えたいことを若い世代に今もお伝えいただいたんですけど、特に若い人たちに訴えたいことだとか、次の世代の人々に伝えておきたいことをあらためていくつかこれというのがあれば教えていただきたいです。

(柴田さん):これからは核戦争ですから、戦争だけは避けてほしいと思います。若い人に「核」が怖いということを知ってほしい。「核」の研究はいいですけどね。いろんな研究するのはいいですよ。研究するのはいいけれども、戦争だけは避けてほしいと思います。戦争すれば若い人は全部戦地に行かなきゃなんないでしょ。そうすれば死ぬんです。戦争すれば死ぬということをもっと大事に考えてほしい。運よく私は死ななかつたけれども、戦争すれば死ぬんですから。

とにかく、戦争は駄目ということが第一条件です。ただ私はそれだけです。戦争は駄目。戦争すれば人殺し。人を殺すんですから。今の若い人は簡単に人の命を扱う。命が大事ということをもっと浸透させてほしいんですよ。一つしかない母や父からもらった命。命を大事にしてほしい。今の若い人は簡単に人を殺しますよね。学校教育はどうなっているんでしょう。

●先ほど中学校とか高校で証言をされる機会があったというふうにおっしゃってたんですけど、実際に聞かれている生徒さんとは、どういうやりとりをされたんでしょうか。

(柴田さん):質疑応答の時間を持ってもらうんですけど、質問しないんですよ。この間は久我山高校で話をして「なんか聞きたいことある？」と言ったんですけど、みんなおとなしく聞いているだけ。

●それは、いま戦争のない普通に平和に慣れた生活をしている中で、話を聞いてもなんか現実的に受けとめられないということなんですかね。

(柴田さん):ピンとこないみたいなんです。「へえ～そんなことあったんですか」っていう感じ。平和が70年近く続いていると人間ってこういう風になるのかな。私たちが子どもの頃はもっとシャキシャキしていて、聞きたいことがあったら「ハイ、先生」って聞いてたんですけど。今はあんまりそういうのが活発ではないですよ。どういうわけか。時代の流れですかね。

●今の中学、高校生はなんか目立ちゃいけないというのがすごくあるみたいで。自分の意見を言うとか、

出すぎちゃいけない、仲間外れになるからとか。

●いじめられるとかね。

(柴田さん): そうなんですか。出ちゃいけないってこと、そういうことがあるんですかね。

●大学生が二人いるから、どうですか。

●(大学生1): あるんじゃないですかね。僕はどちらかという、親からあれが駄目、これが駄目と言われ続けて子どもが委縮するパターンなんじゃないかなと思うんですけども。最近、小学生と交流する機会があったんです。僕は大学生協連の役員をしているんですが、「自然の家」みたいな所に行って、たまたまそこに居合わせた団体で小学生団体、留学生の団体と僕らが出て、留学生の団体は何言っているかわからない自己紹介をしていたんです。僕が子どもの時だったらまあまあ笑っていただろうなあと思った所があったんですけど、今の小学生は何にも笑わないんですね。

(柴田さん): そうそう、笑いもしない。面白いことを言ってここでウケルのになと思うんだけど、それがない。

●(大学生2): 先に周りの反応をみちゃうなというのが。笑える場面だとしても笑っていいかわからないからちょっと友達の様子をうかがってみようかなみたいな。

(柴田さん): 私たちが子どもの頃は戦争がずーっと続いてましたけど、わりと大らかでしたよ。昔の子どもは子どもらしかったのね。今の子どもは「大人子ども」してませんか？なんかそんな気がするんです。今の子どもは外で遊ばないですよ。塾やピアノのお稽古、お絵かきのお稽古なんかかんとかばっかりだから、子どもが外で遊んでいない。だから子どもらしくない。子どもは喧嘩もし、泥まみれになって遊んで、自分の意見もハキハキ言うような子の方が子どもらしいと思うんですけどね。だからこの間も久我山高校でしゃべった時も「あ、ここでうけるのにな」と思っても、みんなこうして聞いているんですよ。

●(大学生1): こういう話題の中だと笑えないというのが僕も今あって、ここにいる方たちは慣れてるからこのタイミングで笑るんだろうなと思いつつ聞いていた。それは確かに難しいなと思います。

(柴田さん): そういふことか。「なんか質問は？」と言ったら、もじもじしている子がいるので「あの子聞きたいのかな」と思って指差すと、こうして周りを見て黙って下を向くの。だから昔と違うんですね。

●今の子は今の子の生きづらさがあるって、うちの娘も不登校をやって大変でしたから。

(柴田さん): 生きるのも大変なんだ、今の子どもは。子どもなりに苦労しているんだねえ。

●(大学生1): たとえば、話をする前に先に聞いてみたいことを紙にでも書いてもらって回収した上で話をして、「じゃあみんなからの質問に答えていくね」みたいな形でそれに答えていく。聞いた上での感想にはならないですけども、こういう話は、意外と一人しゃべればポロポロと話をし始めるものなのかなと。

●(大学生2): 話すきっかけがあれば、しゃべる子はしゃべるのかなって感じ。

●なるべく小さい単位の方がいいと思うのね。みんなの前で目立つことをすると恥ずかしいのもあるし、なんかリアクションがあるかなと、そのことでなんか言われぬか心配しちゃったり、そういうストレスに弱い。

●真面目くさってると思われちゃうとか。

●今はけっこう突出することでいろいろいじめとかあるから、いじめられないようにいじめられないように委縮している。

(柴田さん): 可哀想に、そういうことだとのびのびと子どもが育たないと思う。

●(大学生1): そうなんですよ。

●「空気読めよ」というのがキーワードになってきたあたりから顕著におかしくなっていると思いますね。悪

いキーワードとして「空気読め」「空気読めない」のを「KY」っていうんですよ。「アイツ、KYだから」って。

(柴田さん): ということなの？

●(大学生2): 高校の時、けっこう使ってた。

●(大学生1): 最近は聞かなくなったね。

●中学生の間にはそこはまだ生きて「KYだ」とか言いますね。はやりってだんだん下に行くじゃないですか。大学生や高校生の方が使い古すと、中学生が「KY」とかが使うようになる。まだ中学生の間には十分生きてるって感じで「空気読めないな」って言っている。

(柴田さん): 可哀想ね、のびのびしてなくて。へえ。じゃ先に聞きたいことを紙に書いて出してもらおうということにした方がいいのかなあ。

●先生と相談してそれもあると思います。工夫するといいかもしれない、今の子に合わせて。「恥ずかしいかもしれないからね」ぐらいに言ってあげるとか。

(柴田さん): おとなしくチーンとしてみんな聞いているの。この間、久我山中学校で話をしたんですよ。中学生を全部集めて私が下で雛壇式でね。私が話したことを参考にして、それから幾日かあとで修学旅行で広島と長崎に行って帰ってきて、その生徒たちから手紙をもらったんです。先生とは懇意にしまして、「感想があったら書けよ」とかって言ったら書いてくれたからとそれをもらったら、なかなか心打たれるようなことを書いてありましたし、「柴田さんが話された所をずっと回ってきました」ということも書いてありました。「なんだ、わかってるんだったら聞いてよ」という感じだけど、聞かないの。部屋を出るときにみんなにお辞儀をしたら、向こうの方で女の子たちがこうして手を振ったから、あら明るい子たちだなあと思ったんです。私もこう手を振ってお辞儀をしたんですけど、質問しないからどうなんだろうなと思ったら、目立っちゃいけないってことなんですね。

●そうですね。それと初めて聞くようなお話だったりして何をどう自分なりに理解していいのか。普段から授業の中で原爆とか被爆者とかいう言葉が出てればそれなりに理解が深まったのかもしれないですね。

●先生方がまず基礎的なことを子どもたちに教えた上で、具体的にお話を聞くとまた違うと思います。先生が教えられないんだと思う。もう若い先生は。証言の方に全部下駄を預けちゃってる。今年、問題になっちゃったじゃないですか。長崎の原爆被災の史跡めぐりで暴言を吐いたお子さんが出たということでガイドをされた被爆者の方がショックを受けられて抗議されたという件。

(柴田さん): そうそう新聞沙汰になったわねえ。先生にも責任があるってことよね。

●先生がまず基礎的な教育学習をやる力をなくしている。だから本当は生徒さんに話をする前に、先生方が事前学習した方がいいかもしれない。一筋縄ではいかないけれど、最低、学校の場でやるわけだから、私はまず先生が事前学習をして、先生たちの言葉で子どもたちにまず伝えてもらうというような工夫が絶対必要なのに、その力が落ちてるんだなあとは思ったんです。教育現場のところですね。

(柴田さん): 今のお子さん、難しいからね。ああそういうことか。全然質問しないというのは、目立っちゃいけないというのが一つあるわけね。わかったのかなあと思って顔を見るとみんな、うんうんうんうんと聞いてはいるの。だから先生自体を少し教育しなきゃだめね。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

1. 可 2. 不可

【聞き取りをおこなった方の記入欄】

聞き取り日時	2014年 7月 31日(木) 18~20時	場所	日本生協連コーププラザ
聞き取りをされたのは	1. 個人 (2) グループ〔名称: JCCU協同組合塾「ヒロシマ・ナガサキを聴き、語り、受け継ごう」Aグループの8名〕		
聞き取り票記入者	三崎 敬子	TEL/メール	
連絡先	〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 番地 主婦会館プラザエフ5階		
住所等	日本生協連資料室気付		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

※お礼の言葉部分は省略

(司会): 話はつきないんですけどあと10分ぐらいなので、今日柴田さんのお話を聞いて、一人ひとり感じたことを1~2分ぐらいで一言ずつお願いして、御礼の言葉と替えさせていただきたいと思います。

(Yさん=日本生協連の職員): こういった証言を聞く場というのはなかなか多くはなく、生協の中でも全国の組合員さんなどに証言を聞く場を設けようと思って、いろいろそういう場をつくろうと思っています。今日お話を聞いてあらためて、被爆者の方が本当にすんなりと話をすぐにできるような状態にはなっていないのに、後世の若い人に戦争はよくない、二度と同じ思いを繰り返してほしくないという思いから一歩踏み出していただいて、こういうふうに証言をしていただけるというのは本当に貴重な機会だと思えました。私たちがこういう話を聞いたことを周りの方に伝えていきたいし、こういう場がすごく大事だということを伝えてそういう場をもっていきたいとは思っています。これからも長生きしていただいて、いろんな方に幅広くお伝えいただければと思います。

(Oさん=日本生協連の職員): 私はヒロシマ・ナガサキ行動に仕事で行ったりしていたんですが、それから部署が変わりまして十数年ぶりにお話を直接うかがうのを楽しみにしておりました。今日はぜひぶん弱られた方のお話を聞くんだというふうに思ってまいりましたら、こんなにお元気な被爆者の方もいらっしゃるんだということで、かえって勇気づけられたような気がします。世界がいろいろ戦争のさなかにある時代ですので、どういうふうに被爆体験した日本から発信できるかということこれから考えていきたいなというふうに思っております。

(Kさん=大学生協連学生委員): 僕自身も2年前から毎年ヒロシマに行っているのですが、いろんな方のお話を聞いているんですが、今日初めて女性のお話を聞かせていただきました。最初は家族に再会できてよかったんじゃないかなとか思ったんですが、その後のいろいろな話を聞いてあらためてやっぱりなくしていかなくてはいけない兵器なんだなということを実感させていただきました。何度も戦争は絶対だめだというようなこともおっしゃっていて、僕も虫も殺せないような人間なので、もちろん戦争もしたくないと思っています。けれども、そういう世の中になってもいいんじゃないかと思っている人もいる中で、やっぱり今、こっちから仕掛けるということはないと思いますが、他国から仕掛けられた時にやはり身を守るためには戦うし

かないんだというような状況もやっぱりやってくるのかなというふうに思いますんで、そこで戦うという以外の
どういうふうな選択肢があるのかといったことを考えていかないと。こういったお話等を含めてどのようにし
て戦争のない世の中にしていくのかといったことを引き続き考えていければな、と思っています。

(Cさん＝大学生協連学生委員):戦争は人殺しとかいう話とか、今が恵まれすぎてもったいないって
お話とかが印象に残りました。私たちがすごく言われるのは「直接話を聞ける最後の世代だ」とか言われ
ていて、今度、大学生相手に「平和を考えるセミナー」みたいなのをやるんですけど、そこでもやっぱり最
後の世代として何ができるんだろうとか、これから社会担っていく一員として後世に何が伝えられるの
かなとかいうのは常に考えていきたいなっていうのはすごく思いました。

(Hさん＝23区職員、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承の会」の会員):私は何度も広島を訪ねて、御幸
橋とか似島とか宇品とか何度も行ったり来たりとかしているんで、今日の柴田さんの話を聞いて、御幸橋
からずっと焼け野原になっていたということとか、その時の光景がまざまざとイメージできました。だから自
分で歩いてみてはじめてわかることとかもたくさんあると思うので、もう一度道をたどるとかいうことでもっと
自分のこととしていきたいなあとと思っています。8月の4、5、6日の原水禁の大会に労組代表で行きます
ので、被爆者の方のお話を聞くという分科会に行こうと思っています。今日のお話を聞いたことを糧に、
また被爆者の方のお話を聞いて自分のものにしていきたいなと思っています。

(Iさん＝元日本生協連職員):長崎出身です。父は結婚していて妻子がいたのですが原爆で亡くなりま
した。幸い父は戦争に行っていたので原爆にあわなかったのです。父が再婚して私が生まれました。小
学校の時、8月9日は登校日になっていて原爆の話をされていた記憶があります。気にしないでお墓参り
をしていたのですが、お墓をつくづく見たら異母兄弟の年齢が5歳とか3歳とか刻まれていました。これか
らは兄弟の分まできちんと生きていかなければいけないなと思うようになりました。今日はお話をうかがっ
て、あらためて原爆の恐ろしさ、戦争の恐ろしさにじーンときて、皆さんと一緒に学習しノーモア・ヒバクシ
ャの運動に関わって行きたいと思いました。

(Rさん＝日本生協連職員):私も父と母が広島出身で、音戸と呉で当時は子どもだったので直接的な体
験ってような話は聞いたことがないんです。ずっと広島に住んでる親戚たちもやっぱりそういう話はし
ないんです。なので今日お話を聞けて、逆にこっちも遠慮して聞けなかったのが悔やまれました。母も死
んでしまったし、もうちょっとちゃんと聞いておけばよかったなって。柴田さんがお元気で明るくていらっ
しゃるので、その時代の中で子どもたちは生き生きとして元気だったよと言われてみると、そういえば親戚の
おばさん、今でも元気な人もいるし、その時代時代ですごく楽しく生きている人もいるし、語らずに死んで
しまう人もいるし、いろんな人生があったんだなと思ひながらお話聞かせていただきました。やっぱり次の
世代というか、私も子どもが2人いるので、今日聞いたお話も帰ってすぐにしゃべんなきゃと思います。そ
の時々思ったこととか、今もお元気でいらして戦争は絶対だめだし人殺しだと言ってたよと、とにかくお話
しされてた言葉を受け渡すだけでもしていきたいなとすごく思っています。お元気でもっともっと長生きし
ていろんな人に話しかけていただきたいです。

(柴田さん):とんでもない。もう十分長生きよ。お話するのに悲惨なことは話したくないんでね。

●いまだにそうなんですね。

(柴田さん):そうです、やっぱりね。

●お話しされてその日はちょっと気持ちが動揺するとかそういうのはありますか。

(柴田さん):そういうことはこの頃はないんです。

●やっぱりお話しされ始めた昭和30年代ぐらい、30何歳ごろはありましたか。

(柴田さん):ありましたね。あの時に兄が亡くなった、あの時に母が亡くなったとか、お友達が亡くなりましたからね。そういうことをふーっと思うとちょっとつらいものがあるんですよ。この頃はもう慣れっこになって、若い人に伝えたいということで私はお話するわけでね。とにかく戦争してほしくないから若い人に伝えなきゃなんないと思うので、たまたま武蔵野は市立1中から6中まであって、そこに時々行って話をするんです。やっぱり若い人に話をした方がいいかなと思うんですよ。

(Mさん＝日本生協連職員、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承の会」の会員):最近の世の中がきな臭くなって、安倍政権があんな風になっててちょっとへこんじゃったりもしているんですが、フェイスブックもやっていて、その中で情報としていただいた7/1のTBSテレビ「NEWS23」での半藤一利さんの集団的自衛権に対するコメントを聞いて元気が出ました。今は戦前と似てきていて危ない状況になっているけれど、戦前との決定的な違いがある。悲惨な戦争の体験をした人たちがお元気でいらっしゃる、またはその方たちが語り伝えていることによって戦争は嫌だよねという厭戦の気分を持っている国民がまだまだ多い、というようなことでした。そうか、そこに希望をもたないといけなよなと思ひ直して、戦争は嫌だなんていう気分をみんなで確認しあう場として、被爆のご証言をいただいたり、戦争体験を聞くというのが大きく役に立つのかなと思いました。いま話に出た「いざ攻められたらどうするか、戦うしかないのかな」っていうところも、戦う局面にする前までに外交手段としてどうするかっていうのを盛り上げていく。戦争をする前に戦争を避けるための努力って絶対できるはずでしょ。

(柴田さん):そうそうそうそう。そうですよ。

(Mさん):だから、正義なき平和か、正義を追及して戦争にいつちやうかっていうかということで、絶対の正義ってないわけじゃない。権力者が言う「正義」ってあやしんだよね。彼らの好きな考え方を「正義」って言うだけで、国民にとっては正義じゃないかもしれない。多少無理なことを言うてくる中国とかロシアとかを相手にしながらも、うまくなだめながら戦争に入っていくかないということの方が国民にとっては正義じゃないですか。

(柴田さん):うん、そう。

(Mさん):「正義」をふりかざす政権におかしいよって言うていく世論とか、もっとちゃんとした外交やってくれよっていう世論とか、そういうことも含めて国民が働きかける芽はまだあるなど。そこを頑張りたい、やれることをやっていきたいなと思っています。

(柴田さん):いやどうも、なんかつたないお話で、大変失礼いたしました。

(司会):あらためて柴田さんに御礼の意をこめて拍手でしめくりたいと思います。

(一同):(拍手)。

(柴田さん):どうも有難うございました。

以上